

「日本の木材活用リレー～みんなで作るビレッジプラザ～」

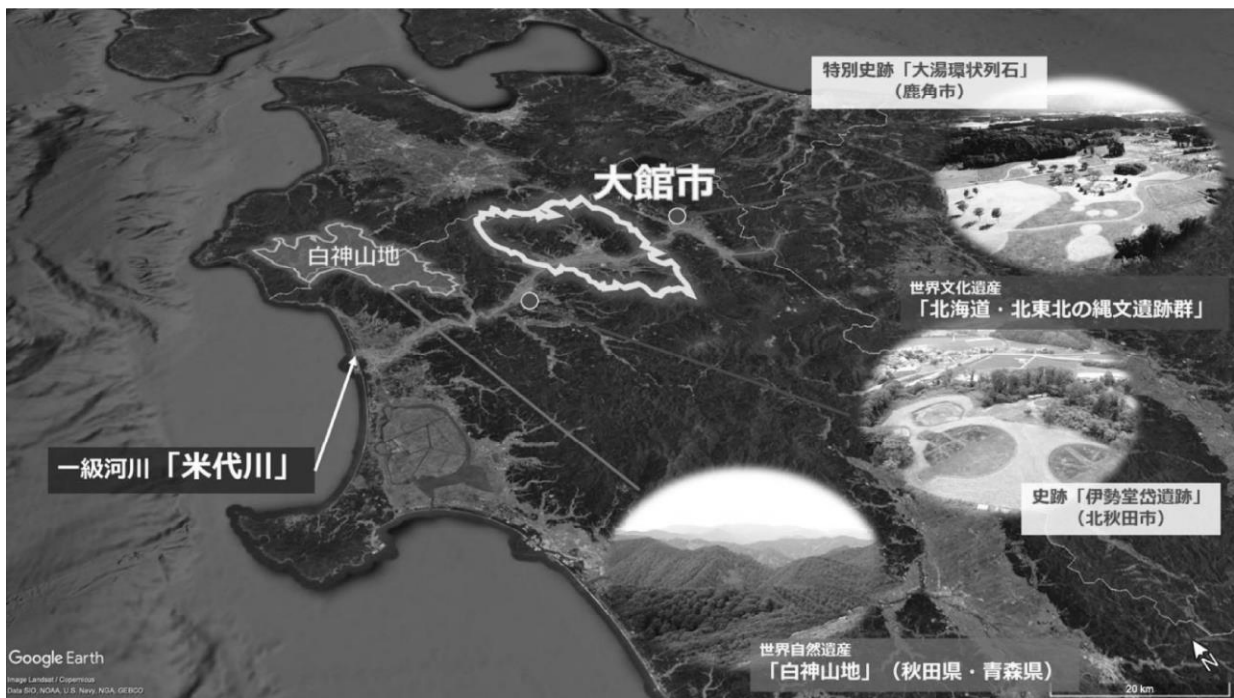
の取組経過について

大館市産業部林政課 主任主事 千葉 泰生

1 背景

(1) 大館市の概要

当市は2つの世界遺産を抱く北東北の中心部に位置（図－1）し、古くから秋田スギの主要産地であるほか、市面積の約8割が森林を占める自然豊かな地域です。平成29年度に「林業成長産業化地域」の選定を受け、林業の成長産業化を目指し活動しています。



図－1 位置図

(2) 取組の背景

①プロジェクトの立ち上げとコンセプト

「日本の木材活用リレー～みんなで作るビレッジプラザ～」プロジェクト（以下、「プロジェクト」という）は、国産材での「選手村ビレッジプラザ（図－2）」建築を目的に東京2020大会組織委員会により創設されました。プロジェクトの特徴はビレッジプラザが大会期間限定の仮施設で、大会終了後に協力自治体に解体木材を返却し、レガシーとして再利用するという内容であり、平成（2017）29年7月に協力自治体の公募が開始されました。



図-2 選手村ビレッジプラザ内観のイメージ

②プロジェクトへの応募について

当市における公募開始時の当時の状況として、林野庁より「林業成長産業化地域」の選定を受け、地域林業の活性化に向け取組を開始していたこと、また、当市出身の陸上競歩選手が世界陸上大会で銅メダルを獲得し、東京大会への出場が期待されているなど、本プロジェクトへ参画するには絶好の機会でした。

そこで、本プロジェクトへの参画を通じて、地域材の利用促進により伝統的な林業地としての地域の復活と、次代を担う若者らを鼓舞することを目標に、プロジェクトへの参画を決定しました。全国63自治体、うち県内で秋田県と当市がプロジェクトへ参画し、平成（2018）30年5月に組織委員会と協定を締結し、プロジェクトが本格始動しました。

2 取組の経過

(1) プロジェクトの前半（大館から選手村へ）

大会開催までのプロジェクト前半は原木調達から出荷までの取組（図-3）を実施しました。

原木調達では大館市有林や市内の国有林より製材向けのスギを調達しました。

調達した原木は地元製材工場で集成材向けのラミナに加工、その後、集成材・プレカット工場で集成材製造とプレカットを実施しました。

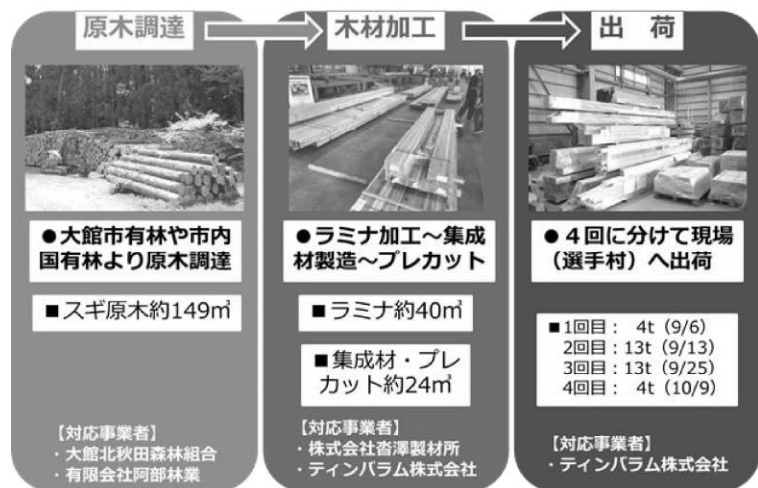


図-3 原木調達から出荷までの取組

木材加工後、選手村の現場へ4回に分けて運搬し、運搬後は組織委員会側で建築工事を実施しました。出荷の際には、記念イベント（図－4）を開催し、市出身陸上選手の小林快さんや同選手母校の陸上部員にも参加いただきました。



図－4 木材出荷式（令和（2019）元年9月15日）の様子

木材の出荷後、建築工事が順調に進み、令和（2020）2年1月末に選手村ビレッジプラザの内覧会（図－5）が開催され、当市が提供した木材の使用状況を確認することができました。夏に開催される大会の期間中に多くの選手や大会関係者に市産木材を見ていただく予定でしたが、新型コロナウイルスの蔓延により大会が1年後に延期されることが決定しました。

その翌年、緊急事態宣言下での大会が開催されましたが、施設は選手ら関係者に利用いただいたと伺っています。



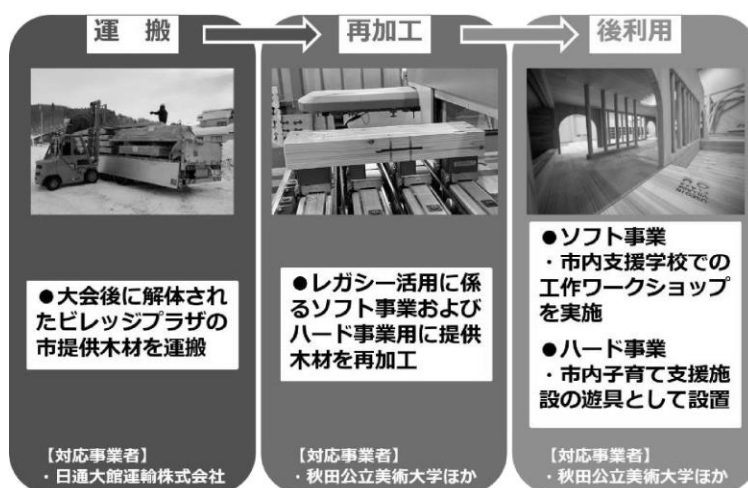
図－5 内覧会（梁部分が大館市産木材）

(2) プロジェクトの後半（選手村から大館へ）

後利用までのプロジェクト公は大会終了の木材運搬から後利用までの取組（図－6）を実施しました。

解体スケジュールに合わせて都内から市内への木材運搬を実施し、後利用に向けて木材の再加工を実施しました。

後利用についてはワークショップ等のソフト事業と再加工品の設置に係るハード事業に分けて実施しました。



図－6 木材運搬から後利用までの取組

①大会のレガシー活用について

大会のレガシー活用（図－7）に向けて、ソフト事業では秋田県立比内支援学校の生徒を対象に、レガシー材を用いたワークショップを開催し、森林・林業やプロジェクトへの理解を深めるとともに、取組を通じて林福連携を目指しました。

ハード事業ではニプロハチ公ドーム（図－8）のパークセンター内の子どもの遊び場に木育遊具の設置を行いました。

両事業ともにデザイン・アートを得意とする「秋田公立美術大学」に協力いただき、事業実施にあたっては「秋田県水と緑の森づくり税事業」を活用しています。



図－7 ビレッジプラザの解体木材



図－8 ニプロハチ公ドーム

②ソフト事業の取組

ア ワークショップ1回目（令和（2022）4年9月26日）

1回目は、高等部生徒向けにプロジェクトに関する出前講座（図－9）を行い、取組背景や後利用の取組について理解を深めていただきました。



図－9 出前講座の様子

イ ワークショップ2回目（令和（2022）4年10月31日）

2回目は、後利用のアイデアを考えるため、再加工された木材を実際にふれて（図-10）、積んだり並べたりして遊びながらアイデアを考えていただいた後、グループごとにアイデアをまとめ各グループで発表いただきました。



図-10 ワークショップの様子

ウ ワークショップ3回目（令和（2022）4年12月20日）

3回目はプロジェクトや校内での取組を高等部から中等部の生徒へ説明していただきました（図-11）。これは、上級生から下級生へ伝えることで取組内容を下級生が受け継いでいくとともに、校外の地域の方々にも取組を発信していくことを目指しています。説明後は、先輩・後輩で後利用に関する話し合いを行ったほか、前回出たアイデアを基に試作した積み木箱（図-12）がお披露目されました。



図-11 プロジェクト説明の様子



図-12 積み木箱（レガシー材活用）

③ハード事業の取組

ニプロハチ公ドームのパークセンター子どもの遊び場の乳幼児コーナー（図-13）にビレッジプラザ木材を活用した遊具（Ⅰ：トンネルの広場、Ⅱ：テーブルとベンチの丘、Ⅲ：見守りのベンチ、Ⅳ：木の車、Ⅴ：木もれびの部屋）を設置しました。

子どもたちが遊具を行き来して空間全体を動き回って体を鍛えられるよう、「小さな小さなオリンピックスタジアム」をコンセプトに制作しています。

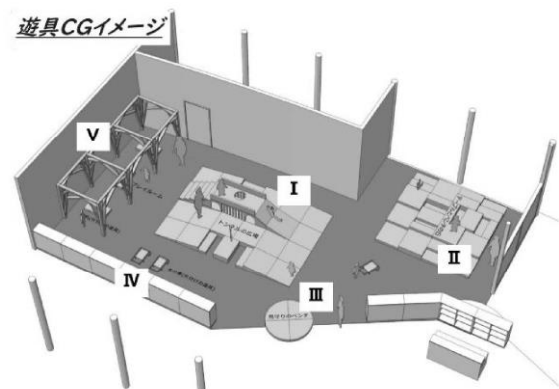


図-13 遊具設置イメージ

<遊具等の写真>



図-14 トンネルの広場



図-15 テーブルとベンチの丘



図-16 木もれびの部屋（ビレッジプラザ
のレシプロカル架構をイメージ）

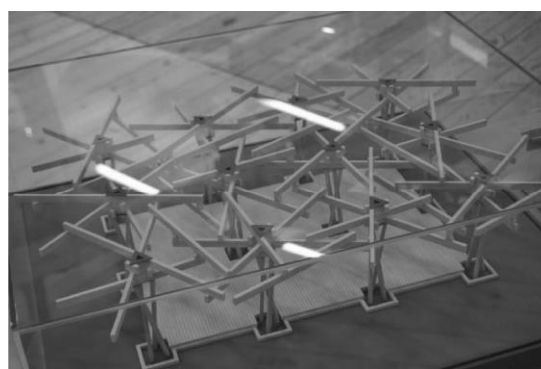


図-17 レシプロカル架構イメージ模型

3 取組を振り返って

プロジェクトの前半と後半とで次の成果が生まれたと考えています。

(1) プロジェクト前半

- ・ 林業成長産業化地域として川上から川下までの木材供給を自ら実践することができた。
- ・ 林業などの業界関係者だけでなく市民やスポーツ関係者とともに大会の盛り上げに貢献することができた。

(2) プロジェクト後半

- ・ 解体木材を再利用する持続可能な取組を通じて SDGs に貢献できた。
- ・ 秋田県立比内支援学校のような本プロジェクトを共に発信してくれる仲間が増えた。

選手村で世界中の選手達を支えた木材が、次世代を育む遊具に生まれ変わり、これからは子供たちの成長を見届けてくれると思っております。

数々のエピソードがありましたが、本プロジェクトの名称に「みんなで作る」とあるように、ビレッジプラザに向けて“みんなで作って”、大会終了後の後利用も“みんなで作り上げた”とても素晴らしい取組でした。取組開始から後利用まで携われたことに誇りをもって、今後も林政推進に貢献してまいります。